

(端裏書)

「九右衛門様 三郎右衛門」

御手紙致拝見候、如仰先日ハ分家祝儀
無障相済致安心候、其節□□□御出
之處何之風情も無御座残念之至^ニ
御座候、然^者御内願之儀御書状も出来

^{二付}、日隱様へ御差出方之儀御詞書

之趣致承知候、河新事急々参候

儀も無之不參共取計方も可有之候

然ル處弥三右衛門嘶^{ニ而}も日印之

方近年不面白□□□実否之

如何成も存不存申候を以實否共^ニ候得ハ

都合不宜是^者總泉寺御頼被成候

方宜式参考申候、秋印ハ右方丈

至極宜候得共是も日印へ願込候

迄^ニ御坐候、右御願之儀ハ未鳥府儀

御沙汰^ニ至候間敷東府^{ニ而}出来

候事之様^ニ候ハヽ、左候得ハ方丈

御頼より宜様奉存候、急々御頼

込可然ト被存候、其内新三郎参候

ハヽ、日印之方様子を聞糺厚

頼談いたし可申候、右御答迄

事「　　」候、以上

十二月廿日

尚々袖控ハ先御返し申候、其内

御廻し置跡之處無御座候ヘハ

重便御廻可被下候、且又段々

御配意可被下候、光三郎義□□

罷帰先程之悪敷方^ニハ無御坐候

此段御安意可被下候、書外貴顔

可得御意候、以上